



夏には、多様な子どもたちのチームと社員ボランティアが北海道ニセコ町でサマーキャンプを行っている。

企業と
地域が つながるとき

第5回

企業とNPOと一緒に『事業評価』に取り組む!!

多様な子どもたちの架け橋プロジェクト

東京ボランティア・市民活動センター(以下、TVAC)は、世界的な金融機関であるUBSグループと一緒に『多様な子どもたちの架け橋プロジェクト』(以下、BBCプロジェクト)を2008年から実施しており、今年で5年目となります。

本プロジェクトは、児童養護施設の子どもたち、低所得の母子家庭の子どもたち、障害のある子どもたち、多文化・外国にルーツのある子どもたちを対象として、ふだんなかなか経験できないようなチャレンジの機会を提供し、成功体験を積み重ねることで自信を高めたり、社員ボランティアを始めとする多様な人たちと出会い、協力しあうことの大切さを学ぶことを目的としています。

本プロジェクトを実施するにあたっては、コミュニティ・パートナーズ(以下、協力団体)と呼ばれるNPOや福祉施設と連携して企画・運営しています。また、多くの社員ボランティアが全てのイベントに参加・協力しています。

BBCプロジェクトの構成は、各協力団体が中心になって実施するコミュニティ・プロジェクトと、5つの協力団体から2名ずつの中高生が参加し、1年間を通して活動するユース・チーム・チャレンジ(以下、

YTC)、子どもたちがUBSを訪問し、金融や仕事について学ぶUBSオフィスツアー、そして、5つの協力団体の組織力を強化するための協力団体セミナーの4つの柱から成り立っています。

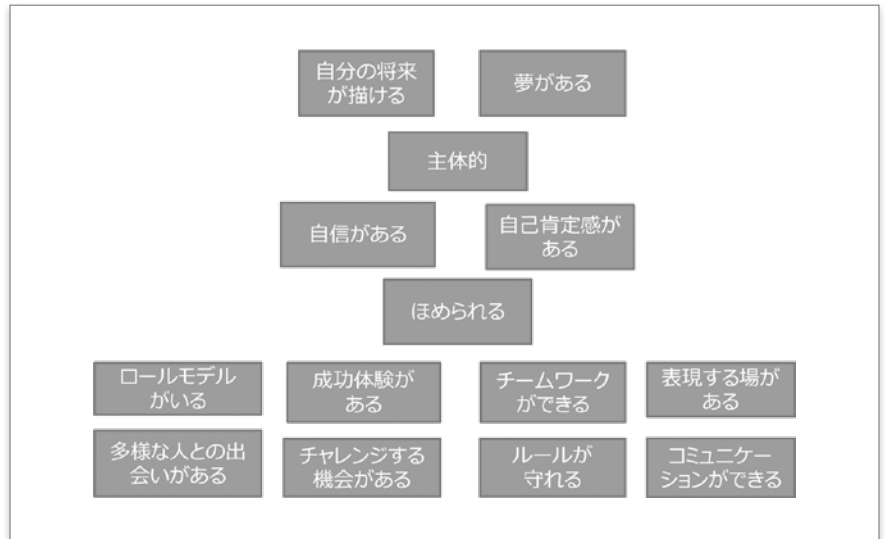
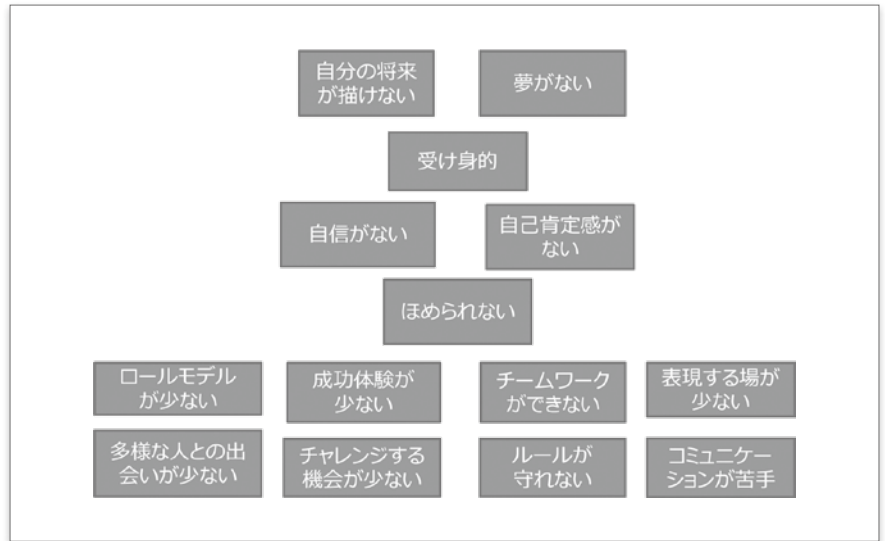
プロジェクトの中心課題と評価仮説

昨年の春、UBSの担当者から「BBCプロジェクトについて、参加者数や満足度だけではなく、子どもたちにどのような変化・成長があったのかという事業効果を明らかにしてほしい」という課題が出されました。

そこで、まず、協力団体のスタッフの方々と一緒に「事業評価について学ぼう!」ということになり、独立行政法人大学評価・学位授与機構研究開発部准教授・日本NPO学会会長の田中弥生先生を講師としてお招きして『評価とは何か?基本理解から実践へ』というテーマで協力団体セミナーを開催しました。

田中先生から、評価の目的、種類、対象、評価者、方法について1時間程度の講義をいただいた後に、田中先生にファシリテーターになっていただき、協力団体5団体とTVACとUBSが参加するワークショップを行いました。

まず、本プロジェクトが解決しようとし



ている問題は何かということについて話し合いました。それぞれの協力団体が支援している子どもたちが抱えている問題について、カードを使って洗い出します。そして、それらを、『原因→結果』という関係で、整理したものが図1の『問題系図』です。一番中心となる問題は、子どもたちに「自信・自己肯定感がない」というものでした。

その原因となる問題群が図面下半分に並んでいます。例えば、自信・自己肯定感がないのは、「ほめられない」のが原因であり、その原因は、「成功体験が少ない」から。そして、「成功体験がない」原因は、「チャレンジする機会が少ない」からとなります。そして、今度は、図面上半分を見ていくと、「自信・肯定感がない」ために、「受け身的

となり、そのために、「夢がない」「将来が描けない」という結果が続いていきます。

この「～だから」という問題が起きる」という問題系図を、「～すれば～のようなよい結果となる」という『対策→成果』という形に表現を変えたものが図2の目的系図です。まず、中心問題である「自信・自己肯定感がない」を「自信・自己肯定感を持つ」という表現に変えます。そして、図面下半分がそのための対策となり、上半分がその成果となります。例えば、「チャレンジする機会がある」と「成功体験がある」となり、そのことよって「ほめられる」ことになり、「自信・自己肯定感がある」となります。そして、「自己肯定感がある」と、「積極的」になり、「夢をもつ」「将来が描ける」ようになります。

こうした作業をすることによって、BBプロジェクトの評価の仮説は以下のようになりました。本プロジェクトでは、4つの対策、つまり、①ロールモデルとなるような多くの人との出会いを用意する、②さまざまなチャレンジと成功体験の機会を提供する、③チームワークを学ぶ、④コミュニケーション力を身に着けることによって、子どもたちが自信・自己肯定感を高め、将来に向かって積極的に生きていくことができることとなります。

子どもたちの成長を測る評価指標

次に、子どもたちが自信・自己肯定感を持てたかどうかはどのような行動でわかるかということについて話し合いました。これが評価指標と呼ばれるものです。セミナーでは時間が足りなかったため、後日、各協力団体からメールで回収したものを整理したのが図3-1の子どもたちの成長を測るアセスメントシートになりました。

これは、29個の評価指標を質問形式にし、「自己受容」↓「外界への関心」↓「他者との関係づくり」↓「社会参加・貢献」↓「将来への希望」の5つのカテゴリーで分けています。各質問に対して、「とてもよくあてはまる＝5点」「少しあてはまる＝4点」「どちらともいえない＝3点」「あまりあてはまらない＝2点」「まったくあてはまらない＝1点」の5段階評価で採点します。

そして、YTCに参加している子どもたちが自分自身について回答するとともに、同じ質問項目を用いて、NPOのスタッフが担当している子どもを評価し、両者を比較することにしました。調査時期は、すでにYTCの年間活動がスタートしていたのですが、一番大きなイベントである北海道ニセコ町での2泊3日間のサマーキャンプの前後、およびYTCの活動がすべて終了した11月末の3回実施しました。

アセスメント調査からわかったこと

その結果が次ページの図4となり。個

29の質問項目はすべて5点満点なので、個

人の最高得点は145点満点となります。図4-1の子どもたちによる自己評価を時間の流れで見えていくと、サマーキャンプ前には自己評価が低い子と高い子がいること

◆図 3-3: 最終的な成長

チームの成長
6
-2
8
4
0
3
0
4
4
3
6
2
3
9
11
8
0
4
8
5
6
0
0
1
1
0
0
1
1
96

◆図 3-2: 最終的な自己評価

チームの合計点 (5点×9人=45点満点)
33
24
39
40
36
41
44
40
37
28
31
40
33
44
44
41
39
33
43
39
41
38
27
38
41
35
36
37
35
1,077

◆図 3-1: 評価指標

No	質問
1	自分のよいところを人に言えますか?
2	自分の弱いところを人に言えますか?
3	何か自信のあることがありますか?
4	いろんなことに興味がありますか?
5	何か熱心に取り組んでいることがありますか?
6	新しいことにチャレンジしてみたいですか?
7	外国にいったいみたいですか?
8	いろんな人に会ってみたいですか?
9	自分の体験したことを人に話すことができますか?
10	自分の気持ちを人に伝えられますか?
11	初めての人にも話しかけられますか?
12	人の意見を聞くことができますか?
13	わからないことは質問できますか?
14	チーム・チャレンジの子どもたちと仲良くなりましたか?
15	UBSの社員と仲良くなりましたか?
16	耳が聞こえにくい人に話しかけることができますか?
17	手話をもっとできるようになりたいですか?
18	日本語があまり話せない人に話しかけることができますか?
19	英語をもっと話せるようになりたいですか?
20	相手のことを思いやることができますか?
21	チームで協力することができますか?
22	困っている人がいたら何かしたいと思いますか?
23	チームのリーダーになることができますか?
24	社会をもっとよくしたいと思いますか?
25	約束した時間を守りますか?
26	ニュースを見たり、新聞を読みますか?
27	自分が人のために何ができるかを考えていますか?
28	将来こうなりたいということがありますか?
29	あこがれたり、尊敬できる人がいますか?
	合計

◆図 4-1: 子どもによる自己評価

名 前	①キャンプ前	②キャンプ後	③最終回	キャンプでの成長 ②-①	キャンプ後の成長 ③-②	最終的な成長 ③-①
A (中学生・女)	91	98	109	7	11	
B (高校生・女)	90	107.5	114	17.5	6.5	24
C (高校生・女)	101	98	108	-3	10	7
D (中学生・女)	125	130	133	5	3	8
E (中学生・女)	113	130	125	17	-5	12
F (中学生・男)	88	110	81	22	-29	-7
G (中学生・女)	125	133	141	9	8	16
H (高校生・女)	124	114	133	-10	19	9
I (中学生・男)	115	102	133	-10	31	18

◆図 4-2: スタッフによる評価

名 前	①キャンプ前	②キャンプ後	③最終回	キャンプでの成長 ②-①	キャンプ後の成長 ③-②	最終的な成長 ③-①
A (中学生・女)	98		108			10
B (高校生・女)	126		129			3
C (高校生・女)	93		116			23
D (中学生・女)	95		122			27
E (中学生・女)	83		87			4
F (中学生・男)	87		96			9
G (中学生・女)	92		113			21
H (高校生・女)	82		112			30
I (中学生・男)	121		132			11

がわかります。キャンプで大きく評価があがった子どももいれば、マイナスになった子どももいました。このことについて協力団体のスタッフからは、「質問項目の中には、自分ではできると思っていたことが、キャンプで実際に体験してみてできないことがわかったということだろう。自分の現在の力を理解したという意味では成長したともいえる」とのことでした。

また、キャンプの後には、毎月1回の定例会が続き、昨秋には、全国ボランティア・フェスティバル（TVAC主催）の中で開催した『多文化ユース・フェスタ』では、YTCのチームが「世

界にひとつだけの花」を自分たちの5言語（日本語、英語、中国語、タガログ語、手話）で歌い、銀賞を獲得しました。そして、2011年11月の最後の定例会では子どもたちが1年間を振り返ったプレゼンをし、修了証を受け取りました。

こうしたキャンプ以降の経験で自己評価があがった子どももいれば、マイナスになった子どももいます。担当するスタッフからは「中学の卒業が近づき、進路について悩んでいた時期だったから自己評価が落ちたのではないか」という説明がありました。

そして、こうした子ども自身の評価と図4-2のスタッフによる評価は必ずしも同じではなく、スタッフは最終的にはすべての子どもがプラスの成長をしたと回答しています。

このことからわかることは、子どもたちはさまざまな体験を通して、自分の強みや弱みを理解しており、また、当然のことながら、BBCプロジェクトだけではなく、学校や家庭・施設での生活が子どもたちの成長や自己評価に影響を与えているということです。

達成しやすい指標とにくい指標

図3-2は、第3回目の調査（YTC終

了時)のアセスメント結果です。それぞれの子どもは自己評価点をみてみると、個人差はあるものの、チーム全体で見ると、45点満点(5点×9人)中、全ての指標において高い評価点となっていることがわかります。比較的评价点が低いのが、「自分の弱いところを人に言える」「自分の気持ちを人に伝えられる」「チームのリーダーになることができる」の3項目でした。

また、図3-3は、子どもたちの自己評価における最終的な成長幅を示しています。こちらも、個人差はありますが、チーム全体で見ると、大きく成長したのは「UBSの社員と仲良くなった」「YTCの子どもたちと仲良くなった」「何か自信のあることがある」「耳が聞こえにくい人に話しかけることができる」「英語をもっと話せるようになるたい」などです。YTCの目的であり、評価の仮説にもあるように、子どもたちはYTCの活動を通して、多様な人たちと出会い、仲良くなって、自信が高まっているといえるのではないのでしょうか。

一方、マイナス成長した指標の中で、前述の図3-2での総合得点自体が低かったのが、「自分の弱いところを人に言える」と「チームのリーダーになることができる」の2つでした。これらは限られた時間・条件の中では達成するのが難しい指標だとい

うことがわかりました。

評価結果を活かすことの大切さ

2012年10月28日には、UBS大手町オフィスにおいて協力団体セミナーを開き、再度、田中弥生先生をお招きして、自分たちで作ったアセスメントシートとその結果について報告しました。

田中先生からは、「現場で子どもたちのことをよく理解しているスタッフの皆さんだからこそ、適切な質問項目(各評価指標に基づく質問項目)を作ることができたと思う。調査結果はよく子どもたちの変化・成長を表しているといえるだろう。子どもたちはこのプロジェクトだけではなく、学校や家・施設などさまざまな影響を受けているので、子どもの成長という成果とプロジェクトの間の因果関係を説明することは難しい。しかし、重要なのは子どもたちが成長しているということであり、子どもたちにマイナスの変化が現れたときに適切な支援をすること」と、アドバイスしていただきました。

参加した協力団体スタッフからは、「評価したことをどのように活用するかが重要であると思った。スタッフがよりよい支援を行うこともそうだし、評価の結果を子どもたちにも伝え、子どもたち自身が自分の

成長を知ることによって自信がつくのではないか」という提案もありました。

ここ数年、行政や企業、市民など、資金を提供してくれる人たちが事業評価を以前より強く求めるようになってきました。企業が第三者の研究機関に委託して実施することもあります。今回の評価作業を通してわかったことは、評価は事業をより効果的に進めていくためのツールであり、評価の企画・実施・分析・活用のすべてのプロセスに実施主体であるNPO・施設と企業の両者が積極的に参加することが重要であるということです。こうした評価作業を通して、自分たちが何をめざし、現在のところ何ができていて、これから何をすべきなのかという共通理解が深まるからです。また、本プロジェクトには多くの社員の方がボランティアとして参加しており、子どもたちの成長を直接感じてもらえることも大切だと思います。

今回、私たちが試みた事業評価は、さらなる改善を加え、今後も実施していきます。そして、来期はYTCだけではなく、各協力団体を中心になって企画・運営するコミュニティ・プロジェクトについても、子どもたちの変化(成長)を図る評価を試みようと考えています。

河村暁子

(東京ボランティア・市民活動センター)